



# 市大山岳会 ニュース



OCUAC NEWS NO. 17

1995. 10. 1

大阪市立大学山岳会

## TREKKING AROUND THE WORLD!

今年の夏は、海外の山を楽しまれた方が多かったようです。ヒマラヤ、カナダ、ニュージーランド、アルプスなど世界各地のトレッキングを皆さんもお楽しみ下さい。

### ガンジス河流域への山旅

武部秀夫

#### <プロローグ>

日本全体が少しずつ余暇時間を持ちつつある状況の中、私の勤め先も夏バカンス制度（夏に最大2週間連続休暇制度）が昨年からは発足しまして、昨夏は17年振りにインドへ、それも小3、小4の娘をつれての「子連れ旅」でした。インドの経済改革は目に見えてわかりました。「カンパコーラ」が「ペプシコーラ」に全面的に変わっていたり、ただしやはり水は変わりなく、結局下痢になってしまって、「もうインドはいや」というはめになりました。という訳で今年はインドへ女房子供は留守役で「おとうさん一人の道楽旅」となりました。そこで久しぶりにヒマラヤを見に行こうと思い立ち、それもモンsoon中はどんなものだろうかと思い、ガルワール地方のガンゴトリへ向かったのであります。以下、旅のつれづれのままに、今夏の8月2日～8月16日の期間、昔を少し振り返りながら、42才の一人山旅が始まりました。

#### <日程>

- 8/2 岡山→関西空港 (AI315)→デリー
- 8/3 デリーにて準備とバスブッキング
- 8/4 デリー→リシケシ (おんぼろバスの旅)
- 8/5 リシケシ→ガンゴトリ (よりおんぼろのバスで14時間)

8/6 ガンゴトリ→ボジュバサ→ゴームク

8/7 ボジュバサ→ゴームク→タポバン

8/8 ボジュバサ→ガンゴトリ

8/9 ガンゴトリ→リシケシ

(行きよりおんぼろのバスで14時間)

8/10 リシケシ→デリー (まあ、ましなバスの旅)

8/11 デリー→アジメール

(インド国鉄シャタブディ Exp. 2等列車)

8/12 アジメール→プシュカル→ジャイプール

8/13 ジャイプール→デリー

(インド国鉄ジャムタワイ Exp. 2等列車)

8/14 デリー

8/15 デリー (インドでは独立記念日で、全ての店が閉店) → (AI314)

8/16 →関空→岡山

#### <日誌>

8月2日 (岡山→関空14:00 (エアインディア 315)→デリー20:45)

初めての関西空港、テクノロジーの塊。エアインディア 315便は、予定通りテイクオフ。香港で1時間のトランジットの後、インド時間20:45無事デリーのインディラガンジー国際空港着。プライベートタクシーでぼられる事なくジャイシンロードにあるYMCAに投宿。雨が少し降っているがいくぶん暑さはましな感じでありました。とにかくインドが始まる。

8月3日 (デリーにてトレッキングの準備)

今日は朝から雨。そのせいかものすごく蒸し暑い。

YMCAは清潔で朝食付で 280RSは手頃。近くの東京銀行へ行って \$ 150 を換金。\$ 1 = 30.85RS。帰りのリコンファームを済ませてGPO（中央郵便局）に寄ってメールを投函（投函といっても、あのインドのシステムに閉口しながらもスタンプを完全に押したかどうか確認の上）、昼からはオールドデリー北のカシミールゲイトにあるインターステイツバスターミナル（ISBT）にてリシケシ行きのバスブッキング（50RS）。その後、雑踏のチャンドンチョーク、さらにはメインバザールで、ストーブ、インド製のナベ等、若干食料を購入。メインバザールには、何ヵ月も放浪している日本の若者多し。懐かしい限り。

8月4日（デリー 9：30→リシケシ16：00）

8時30分にYMCAを出る。荷物は1日5RSで利用できるデポジットルームに預ける。バスは夏の巡礼シーズンで巡礼客で満席。暑い太陽の照りつけるヒンドスタン平原を北上。14時近く平原の彼方から山らしい地形を確認。いよいよウッタラカンド。15時過ぎ、最大のヒンドゥー巡礼地ハルドワール着。殆どが下車。10人程度の客が入ってきて、のんびりと濁ったガンジス河沿いにリシケシに向かった。リシケシ、懐かしい響き。1977年秋、ナンダデヴィ内院にて登山すべく24才の私。27才の和田さんと2人していました。一瞬のうちに記憶が甦りました。そして、あの時投宿したメンカホテルが、バスターミナルの前の同じ所にありました。思わず、投宿（60RS）。オーナーは変わっていましたが、話をすると倉庫から昔の宿帳を持ってきて、どれ見てみると言わんばかり。ありました。その件ですごく友好がられ、チャイ、コーラ、ビスケット、飲みや食べやでインド人から歓迎されたのは初めてでした。明日はガンゴトリへ長い長いバスの旅。ブッキングはすんなり、バス料金 102RS。

8月5日（リシケシ5：30→ガンゴトリ19：30）

午前4時過ぎ目を覚ます。ホテル前でオートリキシャをつかまえ、ウッタラカンド行きバスステーションに行く。巡礼のネパール人一行10名と同じバス。彼らの話では途中のウツタルカシ以北で雨のため道路が崩壊でここ3日間はストップしているらしいと

の事。まあ行くだけ行ける所まで行こうと決める。3時間でナンダデヴィ方面へのアナクンダ河とガンゴトリ方面へのバギラティ河が合流するテーリーに着く。この後は急激に登行してバギラティ河沿いにバスは進む。14時頃ウツタルカシに着く。ラッキーな事に今日から道路再オープン。同乗のインド人、運転手から「ノンプロブレム」の連発。早速バスの運転台にあるシヴァ神のプロマイドに向かって線香を焚いて、讃歌をかなりたてた。ほとほとうんざりする頃、V字谷の中をバスは走っている。夕刻巡礼地ガンゴトリに着いた。14時間は中年には厳しすぎる。ツーリストバンガローに投宿。ひんやりして寒いぐらい。

8月6日（ガンゴトリ 8：10→ボジュバサ 14：30  
ゴームク 16：35）

ボジュバサまで13km。そうかからないと思っていたものの、山道に入ったらそうはいかない。ガンジス河の源流の一つバギラティ河の右岸に幅1mのきちんとした道が一路。右下にバギラティ河の濁流を見ながら、所々に咲く高山植物を賞でながら、1時間の歩行時間に合わせたようにバツティ（茶店）に立ち寄りながら、ビスタリでボジュバサに着く。ここにはヒンドゥーのヨガのアシュラムもあり、ツーリストバンガローもあり、静かで落ち着いた所。標高も 3,500mあり、北アルプスの双六平に似た所。普段だと正面にガンゴトリ氷河を囲むヒマラヤの峰々が見えると言うが、今は雨期で厚い雲。想像で描いてみる。時間もあることなので、明日からの行動を考え、少しでも高い所へということで 3,900mのゴームクまで往復する。ゴームクへは荒涼とした道を6km。ガンゴトリ氷河舌端。ここからガンジスが始まり、ベンガル湾にあるガンガサガルまで実に 6,000km。ヒンドゥーの巡礼、サドゥーが残っていた石でこしらえたシヴァ神のリングがあった。小雨の中、急ぎ足でボジュバサへ下る。ボジュバサに戻ると、3人のスペイン人、2人のイギリス人、1人のフランス人、2人の韓国人とトレッキングのパーティーが来ていた。夜は国際隊に早変わり。特に韓国隊は来年ポストにシブリン北稜に登るとか。インド人よりも外国人が圧倒的に多い。

8月7日(ボジュバサ8:00→ゴームク9:50→タポバン11:50→ボジュバサ15:30)

今日はガンゴトリ氷河へ上り、お花畑の中でヒマラヤをスケッチしたり、写真を撮ったりしてみたが、はっきりとしない空模様で、一瞬にしかシャッターチャンスがない。ゴームクから先は右岸沿いに氷河末端まで行き、上部で左岸へトラバース。晴れていたら最高のパノラマでしょうか。今日もシプリン、トレイサガール、カルチャクンドは見えなかった。4,200m地点、ここらをタポバンと言うらしいが、1時間近くいて天気回復なしと判断して下降に移る。下りは速い速い。ゴームクには1人のサドゥーが生活していて、名をガネッシュワールギリと言う。12年暮らしていると言う。優しい目が印象的。「もし時間があればラジャスタンのプシュカルに行きなさい。そこに行けば、又心が落ち着くでしょう。と。この言葉が残った1日でした。

8月8日(ボジュバサ9:00→ガンゴトリ14:30)

今日は朝から雨模様。レインウェアに身を包ん

で下山。途中のバッティに寄りながら、甘いチャイを飲みつつ、ガンゴトリに戻る。巡礼宿に投宿。夜は、お祭りがあるらしく、ガンゴトリ寺院

に参る。夕べにガンガで身を清め、ティカーを額に塗ってもらう。異教徒でも入れるのはありがたい。

8月9日(ガンゴトリ5:30→リシケシ20:00バスの旅)

真っ暗の中、早朝バス乗り場へ。昨夜の巡礼宿に南京虫がいたのか、左太股に10ヶ所程やられた様子。やっぱり。へとへとになりながら、ウツタルカシ、テーリーを経て夜8時にリシケシ着。メンカホテル

投宿。又、歓迎。

8月10日(リシケシ6:30→デリー12:30)

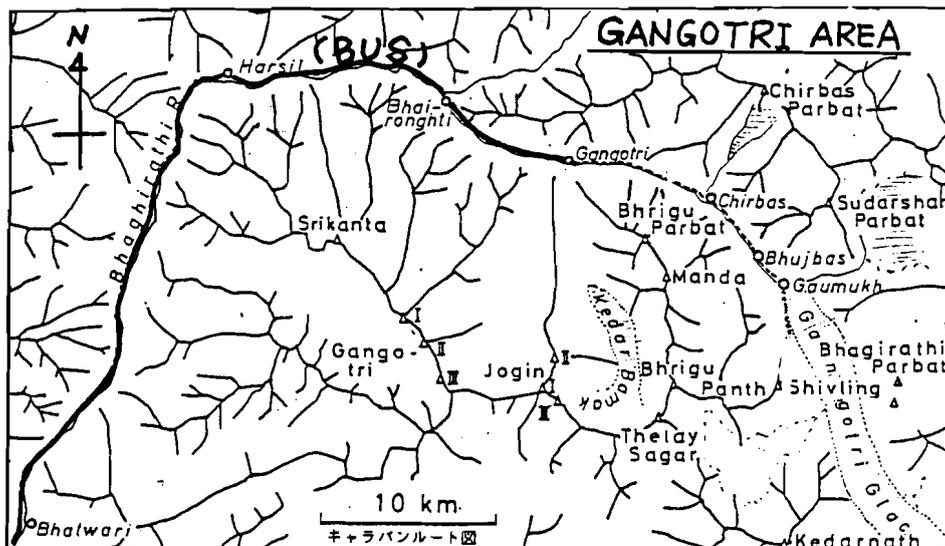
今日はウツラカンドの山旅を終えて、デリーに戻る日。150kmの距離をバンバンとばす。昼過ぎ、雑踏のISBTに着。一旦YMCAに行き、その後のプランを練る。15日のフライトなので、4日は時間がある。ガンゴトリでのサドゥーの言葉通りラジャスタンへ行くことに決める。ニューデリー駅2Fのインターナショナルツーリストビューローに行き、明日のアジメール行き急行の予約。早朝発の列車あり。そのあとメインバザールを歩き、昔からあった「メトロポリスレストラン」にて久々の中華を食べた。今日は疲れも残っているので早く眠ろう。

8月11日(ニューデリー駅6:15→アジメール

16:30シャタブディExp.に乗って)

今日は列車の旅。ラジャスタン州の中央部にあるイスラム教徒のインド最大の巡礼地「モイヌウッデー・チシュティーの墓」のあるアジメールへ。プシュカルはここから11km、バスで20分程。ジャイプ

ールは昼過ぎ経過。ここを過ぎると急に緑が少なくなる感じ。長い列車に揺られて、夕方アジメールに着く。イスラム教聖者の墓をダ



ルガーと言う。早速乗り合いジープで旧市街へ。入口のアグラゲートへのゲートを境に、内はムスリム、外はヒンドゥー、シークと住み分けされている旧市街は、さながらパキスタン。文字もヒンディーからウルドゥーに変わる。ダルガーは入場無料だが、異教徒でも問題なし。偶像を否定するイスラム。男女同席は許さないイスラム。なのに、人々はチシュティーの墓に祈っているではないか。女の人もブルカも被ら

ずに顔を見せているではないか。たまに額にティカをつけたヒンドゥーの人もいるではないか。インドムスリムの特性のようなものを感じたアジメールであった。

8月12日 (アジメール 8:00 → プシュカール → ジャイプール 16:00)

今日はアジメールから山一つ越えたヒンドゥーの聖地プシュカールへ。プシュカールはブラフマー神の聖地、又、11月にはキャメルフェスティバルがあり、5万頭のラクダが集まるということで有名な所。砂漠に大きな湖。湖の周りに多くのガート。少々観光地化のきらいあり。ハヌマーン寺院を参り、早々アジメールへ引き返す。アジメールの方が印象が強かった。バスにてジャイプールへ。

8月13日 (ジャイプール 16:15 → オールドデリー 22:00 ジャムタワイ Exp. 2等車の旅)

ジャイプールからの列車のブッキングが16:15発しかとれなかったので、どうして時間をつぶそうかと思案。昨年の子連れ旅でよく歩いた街なので、ブラブラしても仕方がない。州政府のインフォメーションセンターへ行き、「ジャイプールのハトバス半日コースを申し込む。ピンクシティーとはよく言ったもので、旧市街は見所はある。夜遅くオールドデリー駅着。オートリキシャーのおっさんと料金交渉

に疲れ、23時過ぎ、久々のYMCAへ。

8月14日～15日 デリー

8月15日 デリー-23:35 (AI314) → 大阪へ

8月16日 → 関西空港 12:50

<エピローグ>

2週間のインド1人旅。ガンゴトリ氷河からは、久々のヒマラヤの雪峰を垣間見、長い長いバスの旅、2等列車の旅。40才も過ぎると、肉体的にはインドはきつくなりますが、いろんな人々と会って話を聞き、話すことはありがたいことです。これでインドは5回目になりますが、大きな山を見て、又登りたくなりました。大変実のある山旅であったと思います。それにインドはバスが大変発達してまして、山域深く入ります。アプローチの便利さ、山の規模からライトエクスペディションによい山域でしょう。

今回の経費は全てで17万円でした。

<内訳>

- ・航空チケット (大阪-デリー往復AI、日時 FIX 格安店にて) 130,000円
- ・現地での費用 (ホテル代、バス・列車代、食事、トレッキング準備費) 15,000円
- ・その他土産等 10,000円
- ・日本国内交通費 15,000円

名

---

---

## カナディアン・

## ロッキーの山旅

西田 新

---

---

<参加者>

山本勝・順子夫妻、上堂竹寿、岡本恒夫・育代夫妻、岡野幸義・雅子夫妻、佐々木惣四郎・春子夫妻、藤村達夫・明子夫妻、佐伯政樹・恭子夫妻 (藤村友人)、藤沢和繁 (佐々木友人)、池田歌子 (佐々木姉)、西田新・すみ夫妻、

西鉄旅行添乗員 佐々木惣子 計18名

<日程> 1995年8月13日 (日) ~ 8月21日 (月)

<宿泊>

8/13 カナナスキー LODGE AT KANANASKIS

8/14,15 レイクルイーズ

CHATEAU LAKE LOUISE HOTEL

8/16,17 ジャスパー JASPER SAWRIGE HOTEL

8/18 バンフ CHARLTON'S EVERGREEN COURT

\* \* \*

近くで見るカナディアン・ロッキーは、氷河時代の浸食で稜線がズタズタに途切れ、無数の独立峰の集合を形成している。3,000m級の峰のうち名前がつけられているのは800峰で、残っているものも沢山あり、人跡未踏の峰々や地区も至るところにあると言う。山腹の岩壁に残雪が横方向の筋状に残る美しい風景が次々と現れる。昔、太平洋の海底で堆積した水成岩がプレートに押し上げられて今のロッキ

ーが造成され、その中の柔らかい地層が風化して凹地を作っているからだろう。ここの特産品は、3億年前の海にいたアンモナイトの化石である。

道路と同じレベルの低いところは、まさに森と湖の国である。ロッキー山脈に沿ってバンフからジャスパーへ通るアイスフィールド・パークウェイは、大西洋に注ぐアサバスカ川に沿っているが、道路にガードレールがなく、川に堤防がないので、川面とすれすれに車が走ることがよくある。川に堤防がないのは氷河の雪解け水であって集中豪雨がないためであろう。ガードレールを設けない理由は、事故車が後続車を防がず道路障害にならないようにしてあるとのこと、事故車が川に転落するのは自業自得であって行政の責任ではないとの考えである。ただ、動物が道路に入るのを防ぐため、道路から50mくらいに目立たない素朴な柵が設けられている場所もある。道路の両側に針葉樹林帯がせまっている風景が多い。

いろいろな野生動物たちにもよく出会った。レイクルイーズの駐車場の付近で「あなたは熊の国の中にいる」と書かれた立札が立っていたが、ジャスパーからマリー川に沿う道路を走っていた時、道路を歩いているブラック・ベアに出会ったことがある。熊はゆっくりと、再び川の方へ斜面を下っていった。白い尻と大きな角を持つ鹿、エルクの家族づれには幾度も出会った。白いカモシカのマウンテン・ゴートにも出会う。これらの大きな動物は、道路に車が停まっているのですぐわかる。山径では、氷河時代の生ける化石と言われているナキウサギが葉っぱをせっせと巣に運び込んでいる風景に出会う。しまりす、地りすたちは、行く先々に出没し愛嬌をふりまいてくれた。空を舞うイーグルもよく見かけた。

歩いた山々について報告しなければならない。今年は冷夏で天候もあまり良くなく、朝起きて真先に空を見るが、いつもどんよりと曇っていた。サマータイムと、周りが山に囲まれていることもあって、夜明けが遅い。カナダの最高峰マウント・ロブソンの山麓まで登る計画も、悪天候のため中止せざるを得なかった。以下、実情を列挙する。

①USAシアトル空港の待ち時間を利用して、万年

雪の独立峰 Mt.レーニアの中腹、パラダイス・インまで、専用車で往復し、パラダイス・パークを登る。氷河が眼前に迫り、足元は高山植物の大群落。

②8/14 カナナスキーからレイクルイーズへ移動の途中、モレーン・レイク・ロッジ前(1,885m)からラーチ・バレーへ登る。登り始めて間もなく雨になる。20ドル札に描かれたテン・ピークの景観はガスで見えず。ミネスティマ・レイク湖畔で、バスガイドの吉永嬢が沸かしてくれたコーヒーをいただく。雨はみぞれに変わり寒い。先行した上堂、岡野、藤村3名は、2,605mのゴルまで登るが、雪と強風のためすぐに引き返す。

③8/15 シャトーレイク・ルイーズホテル(1,730m)の裏口から登山径が始まる。先行隊7名がミラー・レイクからレイク・アグネス湖畔を周りジグザグ径をひと登りする。この日も登り始めてすぐに雨に見舞われる。ミラー・レイクの正面に「蜜蜂の巣」と呼ばれる丸い頭の岩山がある。レイク・アグネス湖畔にティーハウスが建っている。プレーン・オブ・ザ・シックス・グレイシャーズと呼ばれるトレイルを進むと2,100mのティーハウス前の草原に出る。天気も良くなり、清水が流れ、りすがちよろちよろしている。この大きな1枚岩の上でラーメンパーティーの最中に、ホテルからの近道を登って来た後発隊4名が到着する。

④8/16 ジャスパーへの移動は、5:00までに荷物を出し、朝食の弁当を受け取って6:00に出発。サマータイムのため外はまだ暗い。途中、ポー・レイクの展望台へ立ち寄るが、まだ陽が昇らず。次はペイント・レイク近くのビューポイントに登るが、ガスで眺望きかず、足元の高山植物に雪が被っている。3度目の下車地、コロンビア大氷原から流出するアサバスカ氷河は専用のバスと雪上車に乗換えての観光。ここの雪上車は、タイヤの直径が人の背丈ほどもあり、60名くらい乗れる。

⑤8/19 ジャスパーからバンフへの移動日。キャベル・レイク湖畔の駐車場(1,765m)からMt.エディス・キャベルのメドウ(2,135m)を往復する。エンジェル氷河が眼前に迫り、途中の岩場では、ナキウサギが冬仕度に忙しい。



らは1cm程のつげのような硬い葉が数枚ずつ交替するらしく、厳しい環境のせいでしょうか。

突然目の前にロッジが現れびっくりした。全体がモスグリーンの低い建物で周りの樹木と全く同化している。中は簡素で、清潔で明るく広いリビングルーム、ベッドルーム、水洗トイレ、シャワールーム、洗濯槽、乾燥室そして環境を考慮したペーパー、シャンプー、リンス等が備えつけられ定期的に汚物が回収されるとのこと。低い丘あたりまで生活の基盤としての牧草が植えられているものの、少しでも自然を守ろうとするこの国のイズムでしょう。そういえば国産車は1台も無いとか納得がいきます。永住の達さんは近くこの国の人と結婚してニコルさんのようなナチュラルistになりたいとか。オーストラリア女性はビジネス街での生活を変えたいとか。またアメリカ人夫婦は休暇をウェストコーストのサイクリングで10日楽しんだ後、このコースに参加したとのこと。皆んな燃えている！ 私は何を求めて1人でやって来たのでしょうか。

### 3月9日 2日目

Mackenzie Lodge	9:00
Lake Mackenzie	9:20
Hollyford Face (1,200m?)	10:26-10:45
Harris Saddle Shelter (1,277m)	12:26-13:25 昼食
Conical Hill (1,515m)	14:00-14:15
Harris Saddle Shelter	14:45-15:00
Routeburn Falls Lodge (975m)	16:15 泊

朝食後、パンにハム、レタス等で自分流のサンドイッチを作る。ロッジをとろとろと下りるとエミリーピークを背にした静かな佇まいのマッケンジー湖に出る。これから1時間程の登りでホリフォードフェイスに出、眼下にその谷を、前面にダーラン山脈の雄大なパノラマを眺めながら、ハリスサドルシェルターまで殆ど水平で、途中水場もあり好天に恵まれ散歩を楽しむ。シェルターで昼食をすませ、コンカヒルまで往復。西の方が雲が多くタスマン海は定かでない。海から吹き上げて来る寒風は強く、ポーズをとって写真におさまるのがやっと。岩影では強い寒風を避けて背丈かやっと1-2cmのエーデルバ

イスが、かすかにその面影を残し、やせ衰えながら僅かの土にしがみついていた。早くロッジに着いたので日没の遅い-8時すぎ-夕方の移り変わる景色をおしゃべりで楽しむ。部屋着に黄色のジャージを着ていると蜜蜂がしきりにまとわりつく。花粉の色だからとか。山では黄色は禁色ね。

### 3月10日 3日目

Routeburn Falls Lodge	10:00
Routeburn Falls Hut	11:10
Routeburn Shelter	14:00 終了
Queenstown	18:30

昨夜からの雨がまだ降っている。3日に1日は雨と言うが下山の日でラッキー。延々と4時間も続くブナ林を、雨を背に下る。2年前には大水で河が決壊し登山者はヘリコプターで救出されたとか。濁流の中にブナの巨木が横たわり突き刺さっていた。コース最後のシェルターでやっと雨も上がり、近くの町グレノキーでビールで乾杯。とても寒く暖炉では薪がゴォーと音をたてて燃えていた。今夜はお別れパーティー。インターナショナルで印象深い人達ばかり。good luck!!

### 3月12-13日

マウントクック村に移動。暑いぐらいの晴天。厚手のTシャツでプレーン観光に出掛ける。仰ぎ見るマウントクックは他の山を制して一際美しくそびえ立っていた。しかし、北壁の幾重にも口を開いたクレバスは固く人の侵入を拒んでいる。白く切り立った3,000m級の山々を、広大なタスマン氷河から見ると360度の展開は圧巻である。麓をハイキングしていると、突然ドーンという音とともに岩や石ころが山肌をつぶして落ちてきた。氷河の末端の崩壊とか・・・後は灰色の世界だった。

旅の終わりに、タスマン氷河湖まで氷河の水を見に行く。非常に硬くて透明。1億年以上も前の氷が口の中で融けていく。青い氷壁が崩れ、氷となって湖に浮かび、やがて川となり海に注ぐ。けれども、心の安らぎと燃えるようなエネルギーを与えてくれたこの美しい自然が、永久に残ることを願って・・・

・多

---

---

## 悲劇と栄光の三大北壁考

### 廣谷光一郎

---

---

1995年6月、術後4年半、私は体調が良いことを理由に40年来の山の友人（中学時代から）を誘って、スイスアルプス三大北壁の探索に出かけた。何故今どきに！ということもあるが、何というか、私達の時代は北アルプスからいきなりヒマラヤであったことに起因すると考えてもらってよい。つまり、北アルプスからスイスアルプスへ、そしてヒマラヤという若き頃に組み立てていたアプローチの具現化である。とは言え、これらの岩壁を登攀するには余りにも虚弱なパーティーであり、よってルートを仰ぎ見ではその想いを馳せたのである。

<6月21日～23日> ツェルマットではロープウェイでクライン・マッターホルン 3,883mへ。すぐそこにモンテローザ 4,634m、そしてマッターホルン 4,478mがある。

アルプスに残された名だたる北壁が、全てミュンヘン出身の登山家たちによって征服されたのは偶然なのだろうか。ミュンヘンには私が生まれた頃（1930年代）から強い情熱をもった登山家たち、ハンス・デュルファー、オット・ヘルツォグ、エミル・ゾレダー、ヘルマン・コーベルその他大勢がいたのである。マッターホルン北壁への挑戦は、既に1925年にヘルマン・コーベルとエミル・ゾレダーによってなされた。しかし失敗のまま、その後コーベルはベネディクトの壁で落石に打たれて倒れ、数年後にはゾレダーも別の山でアプザイレン中に死ななければならなかったのである。

1931年春、ハンス・ブレームとレオ・リットウラーはマッターホルン北壁征服のためのパーティーを組むことを公表した。そして、彼らは激しいトレーニングを重ねた。しかし、固く秘密裏に北壁をねらっていたトニーとフランツ・シュミット兄弟によって初登攀されたのだった。兄のフランツより大胆不敵なトニーによって企てられ、晴天のある日2人は、北壁の左部にある雪壁にとりついた。この壁を無事

に通過した彼らは思い切ってクロアールにとりついたが、遅々として登行は進まず、このクロアールから出られないでいる内に夜になってビバークを強いられている。翌日、午後には悪場を克服したが、行程は長く、彼らは霧と嵐のさなかをやっとの思いで頂上を踏んだのである。更に嵐の中の下降は危険そのもので、さらに辿り着いたソルヴェイの避難小屋に1日半も閉じ込められたのであった。

<6月24日～26日> グリンデルワールトである。1912年にユングフラウまで開通したあの有名な登山鉄道でユングフラウ・ヨッホ(3,454m)に登った。途中、私達はアイガーヴァンド駅(2,865m)に下り立ち、頑丈な鉄格子の窓越しに、この岩壁を垣間見たのである。そして、今から59年前の7月、登山史上またとない悲劇がこの窓のすぐ上で起こったことを確認したのである。

次の日、我々はアイガー北壁全容の偵察である。ロープウェイで対岸（壁）にあるフリスト(2,168m)に登り、ウェッターホルン直下の峠(1,961m)までの2,000mラインの水平ハイキングを楽しみながらのルート観察であった。

アイガーヴァンドは1,800mの標高差をもって聳えている。ルートは3つの部分に分けられる。岩壁の基部は2,200mの高度で、壁の末端から発し、2,800mの山腹まで続いている。第2の部分は3,400mまでの間で、途中に恐るべき障害「ロッテ・フルウ」があり、その上部の岩壁に雪のついた3つの雪田地帯がある。最後の部分は垂直に近い壁からなっており、3,974mの頂上に達している。そして、この最後の部分の中心に「蜘蛛」と呼ばれている雪壁があった。

この北壁の最初の征服者となったアンデルル・ヘックマイヤーは「私のたどる文章は、いつもアイガー登山史をもう一度記すことになってしまう」と述べているように、この壁への挑戦は多くの悲劇的結末を招いているのである。

1936年、3つの別々のザイル・パーティーが壁の直下にいた。ヘルプシュトとトイフェル、アンドレアス・ヒンターシュトイサーとトニー・クルツ、そし

てライナーとアンゲラらである。しかし、ヘルプシュトとトイフェルはアイガーヴァンドへの挑戦が、自分達にとって時期尚早と判断し、そこから近いユングフラウ山群のシュネーホルンの北壁へ向かい、初登攀に成功した。しかし、下山の時、トイフェルはヘルプシュトを引きずり込み滑落、彼は重傷ですが、トイフェルは帰らぬ人となってしまった。

丁度そのころ、他の2つのパーティーも5日後に待ち構えている不幸な運命に向かって出発したのだった。この登攀の様子は、スイスの通信記者が根気よく望遠鏡で観察して、詳しく報道している記事がある。

ヒンターシュトイサーがとったルートはロッテ・フルウの方角にあたる最初の岩場を右に向かって捲き、直登することなく斜めにザイルを操りながら最初の雪壁へ出た。出発当時は非常に速かったそれぞれのパーティーも夕方になると著しく遅くなっていた。そして2つのザイルパーティーはいつしか一緒になって行動していることが確かめられた。更に1人が頭に包帯を巻いていることも確認された。最初のビバークは3,200mの高度の雪田で行われている。

2日目、彼らは6時45分になってやっと動き出した。向かって左(東)の方向にワンピッチの長さだけ足場を切って登り、7時30分になるとひどく腐った氷にアイスハーケンを打っていた。しかしその時、霧のヴェールが垂れこめ終日暗雲が壁を隠していた。

3日目朝、彼らが第2夜を過ごした地点が認められたが、結局2日目は200m程登っただけだった。地形的には比較的容易な所であるのになんと説明したらよいのだろうか。7時頃、彼らの1人がビバーク地点の岩場の下で動きまわっているのが見られた。彼らは集まっては協議している様子であったが、それは2時間も続いた。しかしどうしたことか? 恐ろしいことに、マックス・セドルマイヤーとカール・メーリンガー(アイガーヴァンドの試登を行い、4日間の苦闘の末、最初の犠牲者となったパーティー)の運命が決した場所へ向かって登っているのである。

しかし、しばらくたって彼らは下山することに決

めたらしい。彼らは登りよりもずっとゆっくりと下降し始めた。濃い霧が再びヴェールを引いた。午後5時頃、ロッテ・フルウの上の壁に全員が認められた。その時彼らは負傷者を下ろす操作をしていた。午後9時やっとこの下降を終えたが、高さにして50m位に過ぎず、3日目の下降は高度にして300m、安全な出発点までの高度差はまだ900mはある。

天候が回復しないまま運命の4日目の朝、更に気象は悪くなった。最初の雪壁より下の壁に4人が集まっているのが見られ、その下には200mの高さを誇る「垂直のスラブ」ロッテ・フルウがある。既に3夜もビバークし、ずぶ濡れになった彼らには、登りに斜めのアプザイレンをしながらの横断に対する正反対の動作は無理であった。彼らはルートを探したが、オーバーハングの壁を100m真っ直ぐにアプザイレンするしかなかった。この時、彼らの近くから呼び声がした。彼らは登山鉄道のアイガーヴァンド駅の西の入口から200m程上部にいたのだった。

数時間後、スイスのガイドチームが嵐の猛り狂う岩壁にいる彼らを助けるべく、窓のある地点に向かった。そして、ガイドチームは彼らから100mの距離まで近づいたが、それ以上近づくことはできなかった。雪崩の爆音と風のうなり声の中で、幾度も叫んでやっと連絡することができて、ガイドチームはトニ・クルツが唯一の生存者であるということを知ったのであった。彼は小さな側壁にかりうじて立っていたが、そこへ辿り着くことは不可能であった。そしてザイルを固定する1本のハーケンもない状態でガイドチームは彼を見捨てざるを得なかった。

7月22日朝、トニ・クルツはこの悪夢の夜を生き延びていた。ガイドチームは彼から40mの所まで近づいたが、それ以上は近づけなかった。指が寒さと疲労で硬くなり、ザイルを手繰りよせ、やっとの思いでハーケンや食料が補給され2本のザイルをつないで降り始めるのに2時間もかかった。彼は、寒さの為にアプザイレンは単に胴に巻き付けたザイルにカラビナをつけたただけだった。これが彼の命取りになった。心配して見守るガイド達の方に下降してきてあと3m、彼は2本目のザイルの結び目をどうしてもカラビナに通すことができなかった。

懸命な努力の時間がたち、雪が流れ落ち、突風が吹き、ザイルは振り子のように揺れる。・・・と突然、トニは二言三言、嘆息するとガックリと前屈みになった。彼の勇敢な生命もここに消えたのである。

1938年7月ヘックマイヤー、フェルク、ハラ、ガスパレクラドイツ・オーストリア隊は自分達が生きていることを不思議に思いながらも岩壁で3日間、信じられない冒険を経て頂上に抜け出したのであった。そして、この壁が2度目に登られたのは9年後の1947年、リオネル・トレイとルイ・ラシェナルらシャモニのガイドチームであった。

<6月27日～28日> シャモニである。プレバン(2,525m)から見るスイスアルプスの最高峰モンブラン4,807mと荒々しいボッソン氷河。モンブラン山群の中心であるエギュ・デ・ミディ(3,842m)からの展望はさすがである。だが我々は登山鉄道に乗って3つ目の北壁のあるグランド・ジョラスを遠望する地点、モンタンバール(1,913m)に向かった。

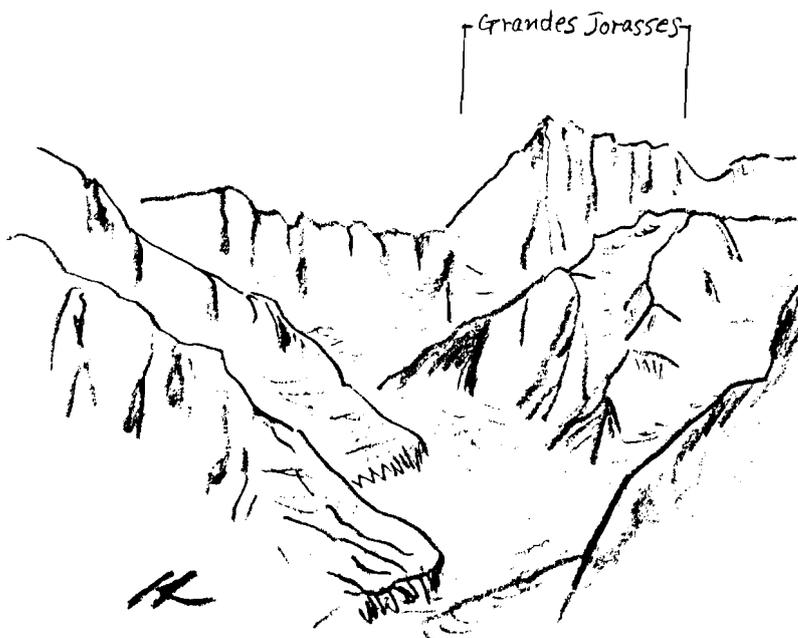
若き日、夢に見たグランド・ジョラス山群の北壁は氷河の行き止まりから右手の山群の最高地点

(4,208m)の直下に巨大なバットレスとして輝いていた。仰ぎ見たアイガー・ヴァンドがより強烈な印象を与えるのに対して、グランド・ジョラスのウォーカー・バットレスの困難さはアイガー北壁をはるかに凌ぐに値するようである。望遠レンズに映るバットレスは正に垂直に最高地点まで、我々登攀者に対しては余りにも過酷なそして理想的なルートを構成しているのである。

このような挑発的なバットレスにも関わらず、シャモニのガイド、アルマン・シャルレルの試登を除いて1932年～1933年にかけては誰も本格的に手がける者がいなかったのはどうしてだろうか。

しかし、1935年ペーターズとマイヤーによって、第1登がなされている。そして20年後の1945年、ガストン・レビュファ、エドワール・フレンドらが第2登し、以降毎年1隊ずつが計算されたように成功している。

それにしても、エギュ・デ・ミディから見るモンブラン、コンデプラン峰(3,475m)への雪稜、そして針鋭峰の岩壁に大勢のザイル・パーティーが入山しているのをすぐそばで見て、若き頃の山への情熱を思い起こした旅であった。多





## 南アルプス縦走

【西村正男】

コース：聖岳～光岳

期間：7月25日（火）～30日（日）

メンバー：山本（30年経）・上堂（35年工）・  
大島（45年経）・西村（47年経）

&lt;1日目&gt;7月25日（火） 晴れ

飯田I.C. (9:40)～(14:30)便り島小屋(15:10)～  
(16:10) 西沢渡T. S<sub>1</sub>

梅雨明けの猛暑の中を山本さんのBMWで飯田に向かう。3時間少し、大阪組と落ち合う。ここからが大変。工事中のため、山道を走った。増水した沢で、立ち往生、更にパンク。世界の名車もタジタジ。小屋からは急な登りのみ。1ピッチで今日の終着地。入山祝いにはスキヤキとビール。たまらなく、うまかった。夜中には、17年ぶりに蛭に出会えた。感激、感激

&lt;2日目&gt;7月26日（水） 晴れ後曇り

T. S<sub>1</sub> (6:00)～(12:40)アザミ畑(13:15)～(13:30) 聖平小屋T. S<sub>2</sub>

肉井で栄養をつけてスタート。トップの山本さんが快調に30分1ピッチのペースで高度を稼いで行く。今日の高度差は1,300m。とにかく、暑い。何度タオルの汗を絞ったことか。快適な気分で、井川山岳会の管理の聖平小屋のテントサイトに着いた。さすが、南アルプスの沢の水は美味しい。国際基督教大学ワンゲル部を始め、結構、登山者は来ていた。我々の逆のコースを取る人が多いそうだ。絶好のキャンプサイトで、ツマミ片手にビールを飲み、18年ぶりの南アルプスを満喫した。夜は満点の星空だ。

&lt;3日目&gt;7月27日（木）

快晴後曇り、夕立（14時～16時）

T. S<sub>2</sub> (5:45)～(8:15)聖岳(3,013m)～奥聖岳(2,978m) (10:15)～(12:30) T. S<sub>3</sub>

アタックには申し分のない天気。山本さんのピッチが快調過ぎて、2時間半で登頂。さすが、3,000mだけあり、どっしりした良い山だ。360度の大パノラマ。剣、穂高、仙丈、塩見、赤石、富士山、上河内岳、茶臼岳、光岳と良く見えた。奥聖岳まで30分。お花畑が美しく迎えてくれた。聖岳周辺にはたくさんのお花が咲いている。ミヤマキンボウゲ、イワギキョウ、ヨツバシオガマ、マルバタケブキ、コイワカガミ、クロユリ、ハクサンイチゲ等々。

&lt;4日目&gt;7月28日（金）

曇り後ガス、夕立（19時～21時）

T. S<sub>3</sub> (6:00)～(9:15)上河内岳(2,803m) (10:00)～  
(11:45)茶臼小屋T. S<sub>4</sub>

本来はここまでが3日間の行程であったが、長老の意見を尊重して一日延ばしたので、随分とゆったりした。ガスは流れていくが、歩いていて何とも気分が良い。景色は十分に見えないが、至る所で高山植物が美しく咲いている。シャクナゲも多い。庭園を思わせるところもある。夜中に夕立がきたが、最新のテントなので、フライシートが雨をシャットアウトしてくれた。

&lt;5日目&gt;7月29日（土） 快晴後曇り

T. S<sub>4</sub> (6:00)～(6:45)茶臼岳(2,604m)～(7:30)希望峰～(9:40)鳥老岳～(12:35)光小屋～(13:10)光岳  
(2,591m) (13:50)～光小屋T. S<sub>5</sub>

人柄の良い小屋のオヤジに見送られて出発。希望峰まではアルプスらしい雰囲気であったが、そこから南は倒木が多く、やたら高度が下がるために、樹木が多く、湿度も多い。昨日までの快適さとは裏腹に、全員、黙々と光小屋のテントサイトを目指す。余り広くはないが、素晴らしいサイトだ。夕方には、雷鳥の親子が姿を見せてくれた。天気も良く、ビールもうまい。

<6日目>7月30日(日) 曇り後晴れ  
T. S<sub>5</sub>(5:45)~(7:50)易老岳~(11:10)易老渡(12:00)  
~(16:00)飯田I.C.~(21:30)調布市

快適な下山となった。早朝で新鮮さがあり、小鳥の鳴き声が心地よい。ルリビタキ、ウソ、メボソムシクイ、カヤクグリ、コマドリ、ホシガラス、キクイタダキ、ホトトギス等々。下山も、1時間前に出た大学生を追い越すスピード。とにかく、60代、50代の先輩は若々しくて強い。今回のリーダー格の先輩も下山路で何度も転び、話題提供に事欠かない。昼前に下山し、また下界の猛暑に再会だ。そのお蔭で、ザルそば、ビール、温泉と下界における最高のお土産が待っていた。

最後に、今回の印象に残る、素晴らしい山行に誘って下さった3名の心温かい先輩に御礼を申し上げます。有り難うございました。多

### 雨の奥駈歌糸己行

【和田城志】

出口のない懊悩に苦しむアル中の友に大森昌也先輩を紹介した。オウムの悪業には我が内なる闇を焙り出された気分になった。哀しい出来事多く、不況の会社に工場作業の手持ち無沙汰がさらにこたえた。こういう時は山に限る。一週間の休暇を頂き、大峰奥駈行に入ることにした。妻は同情のそぶりなく、ただあきれて「気楽な人やねえ」とポツリ。うなだれて出発した。

6月8日 雨

近鉄八木駅よりバスにて熊野本宮へ。うっとうしい梅雨空の平日に乗る人とてなく、貸切り同然のバスは十津川峡谷をひた走る。篠つく雨の中、本宮にて下車、備崎橋より尾根末端に取り付く。七越峰を越え、吹越宿跡へ。何を勘違いしたのか、路をはずして吹越山に迷い込み、リングワンデリング。雨と藪こぎに格闘すること2時間、方向感覚を失って薄暗い杉林の中に初日の夜を迎えた。激しい雨がテントを打つ。素裸になってシュラフにもぐりこんだ。

七越峰に西行の歌碑があった。彼はどのような出で立ちで入峰したのだろうか。

本宮(14:00)ー吹越宿(16:00)ー?(18:00)

立ちのぼる 月のあたりに 雲消えて  
光重ぬる 七越の峰 (西行)  
降りしきる 雨の緑に 輝けり  
“苦人の” “碑”なぞれば

6月9日 雨

とにかく北上と、コンパス頼りに藪こげば、樹間に林道の白い帯が見え、下ってみて驚いた。何と吹越宿跡、昨夕の行動は全く無駄骨、ヒマラヤン・サミッターもあてにはならぬ。林道を西へ少し行くと奥駈道に合流、以後ルートを誤ることはなくなった。遅れを取り戻すべく、ひたすら駈ける。大黒天神岳、五大尊岳、大森山、各鞍部には宿跡の石標あり、往事のにぎわいを想像させるが、今はただ、重苦しい雨雲から湧き出す雨に山全体が濡れそぼって、いかにも修験の山らしい。久々の山歩きでバテバテになって玉置神社に着く。苔蒸した石垣、目まわり10mの杉の巨木が林立する。玉置山は別名沖見岳ともいうから、晴れておれば、熊野灘が遠望できるかも知れない。尾根上の無粋な林道をしばらく辿り、再び山路に入れば、早や薄暗く、こずえの雲にテントを打たせて、貝吹金剛の杉林に泊まる。

出発(5:40)ー吹越宿(6:20)ー玉置山(13:00)ー貝吹金剛(17:20)

枝折せじ なほ山深く 分け入らん  
憂きこと聞かぬ 所ありやと (西行)  
雨すだれ みどりの色の にじみでて  
憂き身を染めし 奥駈の路

6月10日 曇後晴

昨日は妻の誕生日、また全国的に一気に梅雨入り宣言、こんな時に山に入る馬鹿はいない。人影皆無、山また山の深山幽谷。自然林のヤセ尾根となり、鎖場に入ればまもなく地藏岳、石楠花の叢林をくぐる路に落花のおびただしく、足元を気遣うのも面倒だ。

右下山間に上葛川という窪地あり。弘法大師が高野と並んで宗教都市の候補地とした所だ。恐るべきは宗教行者、強靱な肉体、実践力、博学無類の天才空海がこの深山に立つ姿を想うだけで興奮してくる。

南奥驛道が一般化したのはここ10年来のことで、新宮山彦ぐる一ふなる団体の道の整備によるところが大きい。佐田ノ辻には行仙小屋が新築されている。路は北上につれ良くなり、行仙岳、俱利迦羅岳、転法輪岳と林の中の踏み跡をただ歩くのみ。平治宿、持経宿の水平な山路は素晴らしいブナ林である。またも無粋な林道が尾根を横切っており、時間は早い、濡れた衣服を乾かすべく、持経宿小屋に泊まることにする。

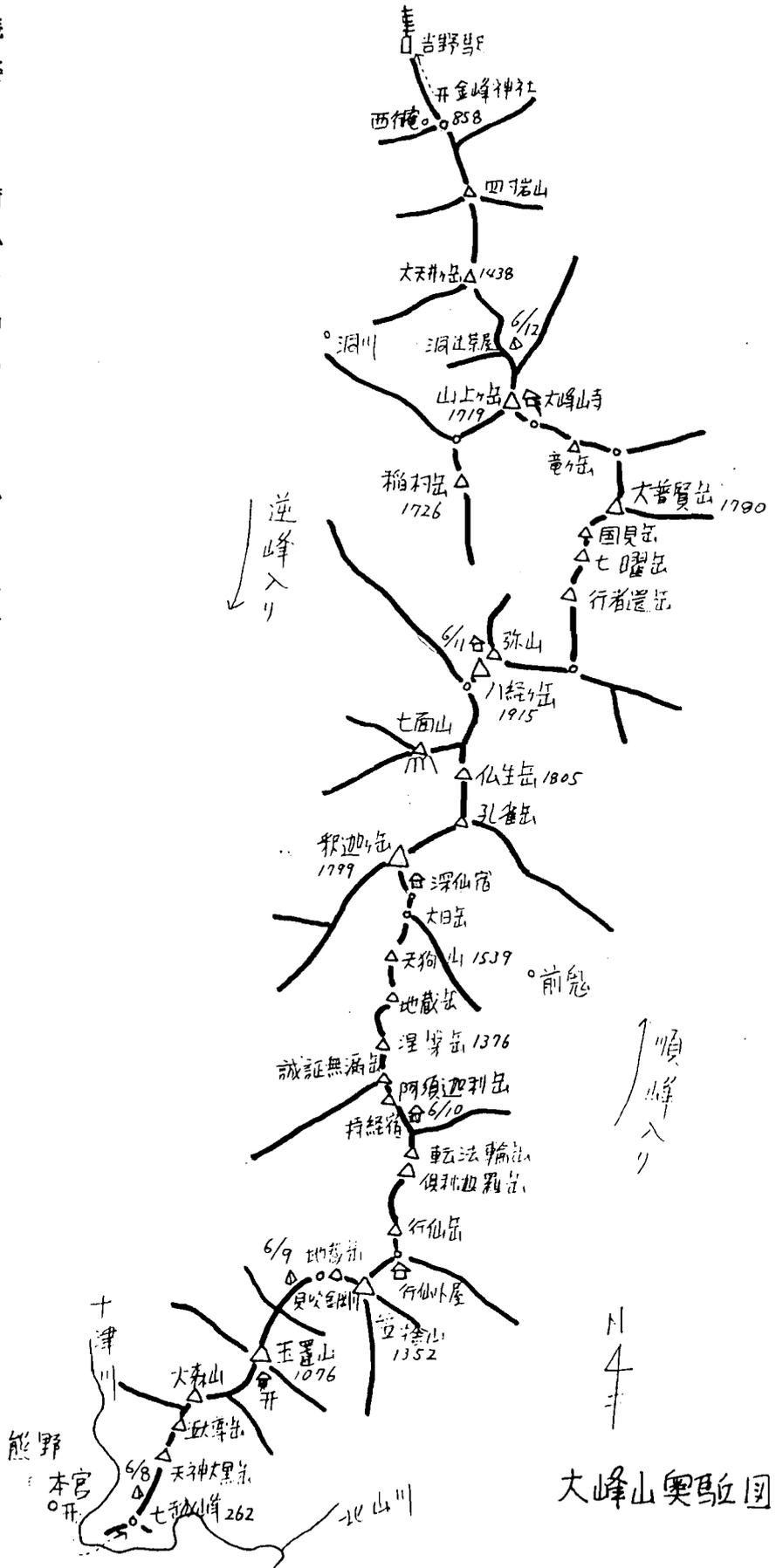
小屋には先着の行者が2人居て、初めて人に出会う。彼らは那智山青岸渡寺より歩き始め、今日で6日目、山田智泉師(70才)は奥驛9度目、北村さん(56才、女性)は九州よりの峰入り5度目。話がはずみ、夜遅くまで囲炉裏のそばで、修験の心を聞く。明治の神仏分離、排仏毀釈に怒っていた。

出発(5:30) - 地藏岳(7:20) - 行仙小屋(10:00~40) - 持経宿(14:20)

こずゑ洩る 月もあはれを 思うべし  
光に具して 霧のこぼるる (西行)  
奥驛の 険しき峰か 敷きつめし  
散華の路の いかで踏むべき

6月11日 晴後雨

邪心なきご来光、重畳たる山並みの奥から真紅の大日が昇る。神々しい。山田師も一心に合掌する。大日の下に薄く雲がたなびいている。「蓮華座である。瑞兆だ。今日はいいいことがある。」と言われる。私も近くの金剛童子での行に随伴する。ホラ貝の音、誦経の音が曉のしじまを破って樹々に響けば、応える野鳥の鳴き声とのアンサンブル、修験の靈験あらたかに、真言、錫杖の音すずやかなり。



彼らに先行して北上、涅槃岳を越えると、笹の背丈も低くなり、林影もまばらに光溢れて、快適な山稜散歩となる。白い花（しろやしおという）が咲き乱れ、鹿の駆けるまさに桃源郷、束の間の晴天ながら、山想遊行の快楽を満喫した。前鬼より上ってくる路が太古の辻で合流、まもなく深仙宿。香水と名付けられた岩清水があり、稜線上の貴重な水場になっている。大峰の名峰第一の釈迦ヶ岳は申し分ない展望台である。北側は岩肌の露出した尾根で、雰囲気は一変する。これよりゆるやかな吊尾根状となって、最高峰八経ヶ岳へ継がかる。

高度が高くなったためか、シラビソ、トウヒの類が多くなり、林相が単調になって目が楽しめない。そういえば、この間に奥駈の両部分けという地名がある。ここより南は胎蔵界、北は金剛界、植相の変化と相まって、その命名理由が分かるような気がする。照葉、落葉広葉樹が胎蔵、針葉樹が金剛、ピッタリする。今日は長丁場でフラフラになって弥山に着く。小雨を理由にして、小屋泊まりとする。

出発(4:50)－太古の辻(9:50)－釈迦ヶ岳(11:20～40)－弥山小屋(17:20)

西行は2度の奥駈入峰を果たしており、18首の歌を残しているが、うち10首は月を詠んだものだ。秋の入峰か、今日は私の鹿の歌3首。

雨の日も 糧想う鹿は 鳴きおりて  
山想遊行 夢喰う我は  
我もまた 求めて止まじ 笙業を  
君が優雅は 知る由しもなし  
小角ならと アルピニズムを 尋ねれば  
けものにまさる 先達はなし

6月12日 雨

雨足は強くはないが、風と濃いガスの中降りしきる。持経宿に雨具を忘れてきてしまい、ゴミ袋でカップを作る。なかなかいい。奥駈行にはカラフルなゴアテックスの最新装備より似つかわしい。

行者還より七曜岳付近はハシゴ、鎖場が多いが、大普賢岳を越えると、路はなだらかな街道風となり、女人結界を過ぎると、整備されつくして、山路の風

情はない。それにしてもよく降る。雨水を山全体がぼったり含み、緑色の光沢を放つ。樹々の雫まで翠を宿し、控えめな白い草花は緑色に染まり切っている。

荷物が軽くなったせいか、日頃の不節制のツケを払い終えたのか、やっと歩行にリズムが戻ってきた。いわゆる三昧の境地、ナチュラル・ハイに入った。ただ黙々と歩く。身体を打つ雨音ララバイ、夢心地。山はいい。雨足が強くなる頃、山上ヶ岳山頂の大峰山寺本堂に到着。折から護摩行の最中で、ホラ貝の音が本堂に響き、誦経の声は雨雲に漂い、厳粛な気分になる。護摩の火が音をたてて燃え上がり、思わず聞き入って、長い時間合掌する。信心のうすい方なのに。

山寺を辞して、登拝路を下るが、強い雨足にギブアップ、洞辻茶屋にて沈。無人の広々とした茶屋の一角に座し、雨と風の音に聞き入る。

出発(5:20)－大普賢岳(10:30)－山上ヶ岳(12:50～13:40)－洞辻茶屋(14:20)

峰の上も 同じ月こそ 照らすらめ

所がらなる あはれなるべし (西行)

たちこめし 狭霧の奥に みみづくつ

恋唄侘びて 我が妹想う

6月13日 雨、雨

横なぐりの土砂降り。山の朝じたく。深夜放送で「犬のおまわりさん」の唄を聞きながら、ラーメンをすすっていると、1人の行者がマントを翻して下ってきた。この山に馴れ切った足取り、未明の雨の中に消えていく後ろ姿に小角を見た。私も彼の後を追うように、肌寒い雨の中へ出発。山路は沢筋のように水が流れる。五番関よりほぼ水平な杉林の捲き道となり、変化のない景色の中ひた下る。吉野まで24キロと道標にある。

銘木吉野杉林には青い霧が立ち込めて、山の精気がヒンヤリした山肌に満ちている。樹の息吹か妖艶を感じた。玉置山で見た古木の淡麗は望むべくもないが、美と生を競って生きるしかない人工林にも、それなりの健気な美がある。

青根ヶ峰手前で林道に降り立つ。タンクローリーが喘いで登ってきた。金剛神社に着く前に、強引に下界に下ろされた気分だ。奥駈の最後を西行庵に憩うべく、奥千本に向かう。西行、偉大なり。したたり濡れる苔の庵、静寂孤高の侘住居、深々と大気を吸い込む。雨はいつの間にか小降りとなり、地表より染み出るような霧雨に変わっていた。

出発(5:30)ー西行庵(10:00~50)ー吉野駅(13:10)

とくとくと 落つる岩間の 苔清水

汲みほすまでも なきすみかかな (西行)

苦の 雨のみ山に かよいきて

ききしにまされる 歌仙と知る

大峰でのまともな山行は初めてである。昨秋、妻とハイキングで弥山に登り、今春、会社のイベントで、光大日講第128回(年)目の峰まいを洞川より山上ヶ岳、稲村岳と歩いたが、精進落しの宴会が主目的のような形骸化した行であれば、面白からうはずはない。

今回は感激した。雨がいい。静寂がいい。ルートは踏跡があり、雪黒部の比ではないが、四方山また山の風景は勝るとも劣らない。身近にこんな絶品があったとはうかつだった。ヘルマン・プールへの憧

憬が西行への敬慕に移っていく道程と軌を一にしている。やはり本邦アルピニズムの開祖は役の小角の他にいないと思う。

それにしても、大峰には雨がよく似合う。歌仙西行と並記すべきは不遜のそしりを受けるかもしれないが、歌紀行を長歌にして締め括ろう。南無神変大菩薩!!アピラウンケンソワカ 苦行する西行の姿を雨の白八夕(別名五葉つつじ)に映して詠める。

遙なる 古人の 跡尋ね 雨のみ山に 分け入れば  
こずゑの雫 雨すだれ 月の光の 影もなく  
ただ雨音の さめざめと 泣き呼ぶ鳥の 棲家とて  
契り結べぬ 空きねぐら 山の暮らしの 侘しさを  
ものあはれと 人し言う 奥の奥なる 大峰の  
岩のつつじの 色さえも 人目触れずば 何ごとも  
あらぬ旅寝の 夢枕 雨のつぶてに かいなくも  
落花のうさを はらすべく 吾をまねきし  
手管とて 歌仙の詩を 密やかに かなでて月日を  
重ぬれば ようやくかないぬ 君が姿見

歌仙詠む こずゑの月に 会えなくも

まされる雨の つつじなりけり

黒部山人 吟

冬

## ボート祭練習記

例年ボート祭は5月最終の土・日曜日に行われるが、どうやらこれに先立つ一週間前の日曜日に練習の機会が設けられていたらしい。この練習に参加したのは、昨年に続いて今年で2度目。

今年はいにくの雨で、JR桜ノ宮駅に集まったのは山辻Dr.・苑樹の2氏と小生の3名。現場までの所要時間が1番短いだらうということで、ダイキン勤務の岡野氏に無理を言う。小1時間での到着を期待したが、それは待つ方の身勝手というもの。実

### ボート祭練習記 清原鉄也

際にはもう少しかかったように思う。日曜の午前、それに外は雨ときている。ゆっくりされていたに違いない。山辻Dr.の強引な要請に波々腰を上げられたことと思う。

世話をしてくれるボート部は沈黙を決め込んでいたのだろうが、艇を出してくれる。昨年は艇庫前の水面で丸を描くくらいの練習だったが、今年は大いにねだって、顔八橋の上から銀橋までストレートに漕ぎ下らせてもらう。岡野氏は学生時代に漕いだま

まで、その後はご無沙汰ということらしいが、スムーズに行く。おかげで銀橋まで無駄なく力を出し切ることができ、五体に満足感が漲る。小生は雨具を着用していなかったが、まだもう少しくらいは我慢できそうな濡れ方。

艇軍に戻った時、朝から仲間の参集を待ち受けていたダイキンの若手社員は、お昼をまわったというのに、ついに待ちぼうけ。岡野重役との間で一言、二言言葉が交わされていた。岡野氏の静かさは昔と同じ。立派になられたものだ。後で知ったことだが、ダイキンは今年は8艇参加とのこと。市大OBは1人も含まれていない由。まさに市民の祭というべきか。

正味10分ほど漕がせてもらうために、暗れるあてのない小雨の中、半日を費やす。間が抜けているというか、気が長いというか、雨の山行を連想させられる。しかし、これはこれで素晴らしい日曜日でした。ドクターは岡野重役に生ビールをご馳走すると言って、苑樹氏ともども駅方向に向かったことでした。

後記。肝心のレース本番の成果は、2艇出して2

艇とも哀れな成績でした。そのかわりロートル同志の素晴らしい樹間の語らいがありました。西田氏のスナップにあるのですが、河川敷公園の桜が好ましい樹陰を作り、効果を上げてくれていたように思います。幹事の手落ちで、ビールの本数が足りなく、ご迷惑をかけてしまいました。誌上を借りましてお詫び致します。

リルン1号 西田、清原、苑樹、佐々木、山辻  
リルン2号 大島、川勝、小松、福山、小笹

他に、南・浅部・上堂・水江・留学生沈君（小林教室）の各氏が賑わいをつけてくださいました。解散は三々五々という形になったのですが、最後の一塊は上堂氏がお仲間と催されている焼き物作品の発表会場へ移動し、芸術というか、文化的というか香気漂う現代のサロンの空気を吸わせていただきました。

ボート祭の指令塔西村正男君が東京へ移ってしまったので、いささか淋しい。ひきつづき東京での活躍をお祈り申し上げたい。♀

## 会員消息

・昭和29年経卒 青木正明氏が、平成7年8月9日ご逝去されました。慎んでご冥福をお祈り致します。

### 青木正明君追悼の記 大倉豊彦

私の「同級生」、そして好漢の青木正明君が、8月9日朝、Sudden Deathで亡くなった。浅部君のもたらした彼の訃報は、他業種の友人と「長崎」や「安全保障」のことなどを談じて少し遅く帰宅した10日夜、家族から聞かされ知った。これまでに亡くした友人は少なくないが、

その後数日、来しかた行く末に思いを馳せて眠られぬ夜を過ごした。首都圏所在の谷口、内藤両先輩からは翌日「一体どうなったのか」とお問い合わせの電話をいただいた。

山岳会の皆さんは既にご理解下さっているように、私は昭和23年、旧制大阪商科大学予科に入学し、当時予科3年の池永会長に山岳部に入れていただいたが、明るく昭和24年大阪市立大

学誕生の時は市大でたった1人の部員であった。その上には旧制商大の方々が居られ、上記の内藤さん(予科3年)、そして池永さん、谷口さん(学部)、それから順繰りに戦後、戦前ご卒業の大橋前会長、さらに泉さんが大先輩へさかのぼるのである。さて、市大山岳部へは間もなく田倉(現在馬野)、信濃氏らが集まり、青木、廣谷、荻野、高木、橋本、大島、川勝氏らが加わって、商大・市大山岳部は活動を上げてきた。しかし、私は嘗てテントキーパーを務めた程度で、先輩あるいは後年の会員の皆様のように優れた山歴はない。ただ、青木氏も加わったいくつかの山行は終生忘れ得ないので、ここに2、3記したい。

(1) 少しは部員も増えた昭和26年5月、リーダー信濃氏で春の槍を目指したが、槍沢から上は悪天候で雪崩などもあり、一旦上高地へ下り、次いで西穂高のピークに立ち、しばしの間、白銀の日本アルプスを眺め得た。青木氏ともども私にとって初めての春山であった。この時、隊員には内藤、田倉、岡田、鶴丸、馬淵、荻野、青木氏らが居たが、この中では先年亡くなった馬淵氏の後を青木氏が追ったことになる。

(2) 引き続き26年7月、池永CLのもと30名に届くメンバーで酒沢合宿に出た。21時を過ぎて騒いでいるテントに対してはCLから容赦無く「飯炊け」の指示が出て、規律は厳正であった。誰が翌日のテントキーパーになったかは失念した。10日程の合宿の後、徳沢キャンプで山祭り(カレーパーティー)、それからA～Eまで数人あての隊に分かれて、それぞれの力量に合った縦走入った。私はEパーティー、リーダー内藤氏、大倉、竹内、青木、奥、高木氏の6名で、仁科三湖の一つ、青木湖でキャンプ休養の後、針の木峠を越え平の渡しを渉り、五色ヶ原を通り、立山のあと劔御前で集中豪雨も経験、称名の滝を眺めつつ下山した。当時のメンバーには失礼だが、ただただ歩くだけで、それ以上のこ

とはやらなかった(やれなかった)が、楽しかった。最高1日30kmは歩き、テントも分担して背負ったから今の陸上自衛隊普通科連隊(初任コースの卒業は軽装でただ1日25km歩ければOKの由)には負けない筈であった。当時、青木君そして皆共によく食べた。

(3) 昭和27年5月18日、新人歓迎合宿の翌日、六甲縦走の途中で岩場を下る練習をした際、殿でザイルを外して岩場を下りた私は、風化した岩が崩落して頭蓋骨折し、池永CL始め山岳部、山岳部先輩団(今の山岳会に相当)に大変なご迷惑をかけ、また御世話になった。青木氏にも徹夜の看病をしてもらった。私は還暦を過ぎた今でも、H氏あたりに何かと揶揄される仕儀となった。このケガが一因で、市大一期生だった私は経済学部で青木氏の1年先輩であったが、昭和29年彼と一緒に卒業して標記のように「同級生」となった。

青木氏とは京都で家が近かったせいもあり、ご父母にも再三お目にかかった。(当時市大生文系の約10%は京都勢だった。)そして、竹内、高木氏ともども、山行の他にも交際が浅くなかった。約10年前、私が首都圏勤務となって後、休日京都に立ち寄って、上記竹内、青木、高木氏を誘い出し、Eパーティーの小コンパを開いた機会が、青木君との今生での別れとなった。末筆になったが、私も面識のある文子夫人はもと「青木塾」の美人教え子であった。遺憾ながら葬儀に出席できなかったが、今秋には、ニューヨークに行かれた内藤先輩のメッセージも携えて墓参したいと願っている。次の山岳会でも彼を知る皆様がたと思い出話はつきないであろう。他に書きたいことは尽きないが、長くもなかったので、別の機会を得たい。想えば、青木氏は良き息子、長じては良き夫、優しい父であったが、少し働き過ぎではなかったか。「63才」は早すぎた。慎んで合掌しご冥福を祈る。

第15回女神湖スカイエン  
デューロ参戦記

奥田尚志

突然、場面は四光峰のキャラバンのシーンになる。四光峰の登山を終了して、休養とこれからの方針を決めるべく、私達は人民解放軍兵舎跡でキャンプをしていた。四光峰の登山の後には、チョー・オユーの偵察とか、カイルスへ行くとかの計画がたてられていたが、結局、戒厳令下のチベットではどの希望もかなえられぬまま下山する事になった。小倉氏と三木君は、自転車でラサまで帰る計画をたてていたため、ブリジストン自転車からマウンテンバイクを借りて持ってきていた。キャンプの周りで乗せて貰うと、とても面白い。しかし、このキャンプまで来た道のりを考えると、また、近くの村までと言って深夜になるまで戻って来なかった2人を考えると、人力は辛いものがあるな、と思ったものである。そこでチベットの高原をオートバイで走る事を想像しつつ、平和な満ち足りたキャンプ生活を楽しんでいたのがあった。もともとオートバイには少し興味があり、大学院生時代に中型2輪免許を取っていた。四光峰から帰ってすぐに会社の後輩が、まさにぴったりのオフロードバイクを数万円で売る、というのに飛びついたのがあった。1年近く動かしていなかったそのバイクが動くようになるには、時間とお金がそれなりにかかったが、機械いじりが好きであった(らしい)私のバイクライフのスタートとしては良かったと思っている。そのバイクはエンジンが壊れ、次のバイクは・・・というように2、3台乗り継ぎ、気がついたら、運転免許では一番難しいと言われる自動2輪の限定解除の試験に合格していたのであった。

という話とは関係なく、私はパソコン通信(以下「パソ通」)をしている。1990年の6月ごろに、「光線銃のチームに入るため」というあまりにオタクッキーな目的で、Nifty-Serveに入会し、徐々にバイクの集まり(「フォーラム」と言う)での活動をするようになった。ちなみにNifty-ServeのIDを持

っている市大山岳会関係の方は、兵頭さん、栃本君、矢倉さんと言うように、数人はいる。NIFTY-Serveに入っていないくとも、今流行のインターネットのIDさえあれば(大手企業の技術系の方なら必ず持っていることでしょう)、相互に電子メールのやりとりができるのである(私の会社でのインターネットのアドレスは、okuda@lab.zeon.co.jpです)。そのバイクフォーラムの仲間と知り合いになり、チームを組んで今回のレース参戦となったのである。

今回参加したのは「第15回女神湖スカイエンデューロ」というレースである。オートバイのレースにもいろいろあって、水着を着たお姉さんがハイヒールで闊歩しているサーキットで行うレースもあるけれど、今回のレースはそういう舗装路で行うオンロードレースではなく、舗装路外で行うオフロードレースである。オフロードレースにも、同じところをぐるぐる回るサーキットのレースもあれば、今回のように普段は、林道や私有地の道をクローズして行ういわゆる「オープン」のレースもある。今回はオープンで時間が長く耐久の要素があるのでオープンエンデューロのレースという事になる。このレースは、長野県は女神湖の近くで行われるので、日本一高い標高で行われるエンデューロ・レースなのである。

今回は、やはりパソ通で知り合った友人の弟さんと共に、私の幼児カラー(ラベンダー色)のKDX125SRで出場した。昨年の春と秋に出場し、春はガス欠でリタイヤ、秋は総合で100位ぐらいだったので、目指すはBクラス1桁、総合2桁である。

「女神湖」は、参加申込書を手に入れる事自体が大変である。今回もパソ通での友人から譲ってもらって、やっと出場権を手に入れたのであった。レース前に行われたライダーズミーティングで、「約4000通の申込葉書が来て、出場できたのは284台であった」とアナウンスがあった。どうも、何度も出ていない人、遠くの人、女性が有利なようでもある(真偽不明)。とにかく、何とか出場できた私はとても幸せである。

「女神湖」のスタートは、まず、Aクラス(排気量125cc以上)、Bクラス(100~125cc未満)、Cクラス(100cc未満)、Lクラス(レディース)で、出場申し込み受理順に出発順位が決まる。3台ずつ10秒おきにスタートするから、全員がスタートするのに、284/3×10/60で、約16分かかる、私達はBクラスで79番スタートだからトップがスタートしてから約13分後にスタートするのである。しかしながら、別にスタート順にタイム補正などはしてくれない。

ところで「女神湖」は1周約15kmで、速い人は約20分で周回する。トップが13周(つまり約200km)すれば終わり、約4時間半で終了する事になる

(そのとおりとなった)。トップがゴール後、30分までにゴールすれば完走となり、それ以降はDNF(DID NOT FINISH)となる。つまり、79番スタートだともう半周以上のハンデがあるのだ。といっても今回結果を見ると、Bクラスの1、2位は総合8、9位に入っている、言い訳は通用しない。ところで、Aクラスで10位以内に入ると「女神湖」の普通バージョンには、もう出られなくなるので、何度出たくて速い人はBクラスに出ているという噂もある(もちろん我々はそのかぎりではない)。

スタートはこの私。3人の中では出足が1番速かったが、ふけなくて(エンジンのパワーが出なくて)、2人ともに抜かれた。なんでふけないかというと、標高が高くて酸素が薄いからである。前回まではその対策をしていたのであるが、そのかわりにオーバーヒートが起る。今回は、オーバーヒート対策のためにふけないのである。ところで、なぜオーバーヒートするかといえば、「女神湖」のコースが殆どガレ場の登りだからだ(もちろん登りだけではなく下りもあるが、フラットな砂利道と舗装路なので、問題にならないのだ)。昨年の春は、オーバーヒートで何度もエンストしたので、教訓である。バイクにもっと低速トルクがあるとか、もっと腕があれば別なんだけど。で、1周目。昨年の秋は春になかった大きな石がコースに蒔いてあったが、今回はそんな事はない。ピットを設営している時、オフィシャルの人が「今回のコースコンディションは厳

しいから、空気圧を高めにした方がいい」と言っているのを小耳にはさんだので、少し高めにしておいた。しかし結局走ってみると昨年の秋よりもまじだったので、後悔したのであった。

さて、走っていて後ろブレーキをかけると、なんだか後輪がよく跳ねる。なにかと思うと、これはレース1週間前に後輪ブレーキのディスクパッドを新品に交換しており、めちゃくちゃよく効くので今までのタッチと全然違うのであった(と気付いたのは殆ど2周走り終わるところだった)。と後でパートナーと話していたら、「やっぱり。早く言ってくれなきゃ。それで転倒しました。」と笑顔で言っていた。パートナーとはコミュニケーションが大事である事を学んだ事を今回の教訓としよう。

ガレ場の登りはやはり渋滞していたが、前回ほどではなかった。ガレ場を登り切ると、やはり温度警告ランプが点灯した。つまりオーバーヒート気味なのである。今回はエンジンストップはいやなので、なるべくエンジンに負荷をかけないように注意して走った(折角対策したのに)。1周目はうわずっていて緊張して非常に疲れる。ピットロードに入ると、制限速度は30kmなので、背中につけているキャメル・バッグからスポーツドリンクを飲む。パートナーとは3周交替の約束なので(ひそかに12週の予定だった)、約束通り3周で交替する。2、3周目は、渋滞も全くなくなり、緊張もとれて、やっとニーグリップ(膝でバイクを挟み込んでコントロールすること)を思い出す余裕が出てきた(単に腕が上がっただけとも言える)。転倒もなく無事に1回目のライディングを終了した。

パートナーと交替したら、1周でピットインしてきた。リザーブにはいったので、給油だそうだ。家でトランポに積む前に、満タンにしておいたのだが、車検前に燃料コックの付け替えをしたり、試走したりしたまま補給しなかったのでリザーブにはいったらしい。計画では6周でライダー交替とともにガス補給をするはずだったのに計算外だった。

3周交替だと、さすがにゆっくり昼飯(サポートの皆様のおかげです)を取り、休憩ができる。と思っただけで自分の番である。

今度もやっぱり1周目は肩に力が入ってしまう。抜いて挨拶しようとして、よそ見をしたら転げた。1周してピットでハンドルを蹴って修正してもらった。2周目はなんでもない所で、転げた。そうすると、直後を走っていたバイクがお腹の上に乗りかかってきた(つまりひかれた)が、どうって事がなくてよかった、よかった。3周目は転げないで走れた。その上、2度目の3周は全くオーバーヒートしなかった。これは、路面状況が良くなったせいなのか、それとも私がうまくなったせいなのか(ナイナイ)?

3周走ってパートナーに交替。しばらくすると、トップが最終周回に入ったとのアナウンスがあった。つまり我々は、11周できるか、10周かのボーダーラインにあった訳だが、結局10周でフィニッシュしたのであった。

さて、メインイベントの抽選会(表彰式はおまけ)であるが、半分以上の参加者に何らかの景品が当たっているのに、くじ運の悪い我々は何も当たらずにすすごと会場を後にしたのだった(昨年の春は「わらしべ長者」をした)。次回は必ず高額商品を当てるぞ、と決意を新たにす我々だった。

最後に我々の順位は、Bクラス8位、総合88位でした。ちなみに、出走台数は281台 完走221台。Bクラス出走台数30台、完走19台でした。♀

## お知らせ

故森本氏、三島氏より蔵書の寄贈があり、これを中心に約600冊の図書管理体制を確立しました。同封の図書目録はその明細です。会員、会友の皆様へ貸し出しいたしますので、下記によりお申込み下さい。(当面は以下にて運営予定)

①図書はダイヤモンド電機㈱に保管する。

②図書係として浅部氏(ダイヤモンド電機㈱勤務)をおく。

③貸出を希望する人は、一回5冊までを図書係に申し込み、係より着払いにて宅急便で送付。一ヶ月以内に宅急便(元払い)にて図書係へ返送する。直接の貸出は行いません。以上

\* \* \*

会員名簿の変更を随時ニュースにてお知らせしてまいりましたが、変更が重なってきましたので現時点での改訂版を同封致しました。さらに変更がある場合は、又ニュースにてお知らせしますので、ご一報下さい。

\* \* \*

現役の夏合宿の報告と、新人勧誘の為に作成したチラシ、葉書を同封します。次号には小林先生の報告など予定しています。



編集後記

- ・皆さんからの原稿の量が増えB5ではおっつかず、今号よりA4版に変更しました。春から我家にやって来たパソコンでいざ編集!と意気込んでいましたが、一向に進まず、やおら長年使っているワープロ専用機を取り出すはめに。次号こそ頑張るぞ。
- ・今年の夏休みはまたまた自転車で、四国は足摺岬から室戸岬まで、途中四万十川を河口から源流まで廻りました。川と海のきれいさに感動しました。
- ・土日が雨ばかりで少々憂鬱。皆さんはいかがお過ごしですか。原稿お待ちしております。♀

《編集:総務幹事 矢倉 睦》